【実践報告】

# 子どもの育ちを支える大人のつながりに関する研究
# ～コミュニティ・スクールの管理職に焦点を当てて～

赤木　進也（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻修了生）
畑中　大路（長崎大学大学院教育学研究科）

## 1　研究の背景

子どもを取り巻く社会の変化は激しく、人口減少や少子高齢化社会の到来、グローバル化の進展、急速な技術革新、高度情報化の進展、貧困率の上昇、人生 100 年時代、持続可能な開発など、多様化・複雑化している。

こういった複雑で予測困難な時代の中でも、学校教育では「生きる力」の意義を改めて捉え直し、子どもたちがその力を発揮できるようにしていくことが求められている。その中において、中央教育審議会答申は、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことを示した。また、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められるようになった（小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編：2)。

さらに、長崎県においても大量退職、大量採用の時代を迎え、教職員の年齢構成の変化も起こっていく。今後は教育の質の維持や向上についても考えていかなければならない。したがって、学校内外において問題が存在しており、もはや学校だけの力では解決できる問題ではなくなっている。そこで、学校は家庭や地域と「つながり」をもち協働を図りながら、子どもの育ちを支えていくことが求められていると考える。

この状況の中で、志水ら（2017:17、256-257）は、「つながり」について、「「教育は人である」という事実に間違いはないが、多忙化や合理化・効率化が顕著な現代の学校状況のもとでは、その基本をややもすると忘れがちになってしまうことも多い。子どもに「つながりの大切さ」を説きながら、自分たちは満足に「つながっていない」現状があるのではないか。」と我々に問いかけている。続けて、「教師の役割は「つなぐこと」であることが見えてくる。」さらに、「教育は学校だけで行うものではなく、保護者や地域社会、他校種、大学や職場との連携を生かすことでより豊かになる。」とも述べている。よって、子どもの育ちは学校だけで行うものではなく、将来的に社会に出て、人とつながることができるように、家

庭や地域とともに教育することが大切であると考える。

これらのことから、本研究では、子どもの育ちを支えるためには「つながり」が重要であると捉えた。その中において、保護者や地域住民も子どもの育ちを支える大人として、当事者意識をもち学校と協働していく必要があると考える。そこで、学校も、家庭も、地域も子どもの育ちを支えるために、互いに手を取り、「つながり」を大事に考える大人集団を構築できる一つの方策としてのコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）に着目した。

## 2　研究の目的

子どもを取り巻く社会がどんなに変化しようとも子どもに「生きる力」を育成するという目指すところは変わらない。

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編（p. 125）には、「学校がその目的を達成するため、学校や地域の実態等に応じ、教育活動の実施に必要な人的又は物的な体制を家庭や地域の人々の協力を得ながら整えるなど、家庭や地域社会との連携及び協働を深めること。また、高齢者や異年齢の子供など、地域における世代を越えた交流を設けること。」と示している。このように、学校教育の目的を達成するためには、家庭や地域住民とともに子どもを育てていくという視点に立ち、家庭、地域社会との連携を深め、学校内外を通じた児童の生活の充実や活性化を図ることが大切である。また、学校、家庭、地域社会が教育機能を発揮することが重要である。

また、学校、家庭、地域の関係性を構築するためには、学校の教育方針や特色ある教育活動、児童の状況などについて家庭や地域に適切に情報発信し理解や協力を得たり、学校運営などに対する意見を的確に把握して自校の教育活動に生かしたりすることが大切である。

さらに、長崎県第三期教育振興基本計画には、「学校・家庭・地域が連携・協働し、総がかりで子育て等の課題に取り組む活力ある地域づくりを推進します」と示されている。長崎県は、これまで学校・家庭・地域の代表者による学校支援会議において地域で育む子ども像を共有しながら、地域総がかりで子どもの健全育成や家庭・地域の教育力の向上、地域の活性化など子どもを安心して育てられる環境づくりを推進してきた。今後は、学校支援会議をベースとして、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の導入及び地域学校協働活動の推進に取り組む必要がある。そして、活動を通して地域住民一人ひとりが地域の子どもを育む意識を高め、家庭や地域の教育力向上を図ることが求められている。

このような関係を構築し、家庭や地域の教育力を学校教育に取り込んでいくためには、管理職として学校を核とした人の「つながり」を生む取組を仕組んでいかなければならない。また、その「つながり」を通して、学校教育、家庭教育、社会教育それぞれが教育機能を発揮することになり、子どもの育ちを支える大人の関係性が構築できると考える。そのためには、管理職としての学校運営に対する思いや考え、子どもの育ちを支える教職員や保護者、

地域の方への働きかけが必要となる。

そこで、今年度までにコミュニティ・スクールとして立ち上げている壱岐市内の８小学校の管理職を対象としたインタビュー調査を行い、管理職として学校教育目標の具現化に向けて、教職員や家庭（保護者）、地域住民に対して、どのように「つながり」をもち、どのようなことを大事にしているのかという点に着目し、考察した。さらに、インタビュー調査から見えてきたことをもとに、チェックシートを作成し、管理職として大事にすべきことを見える化することが本研究の目的である。

## 3　研究の方法

(1)　調査の手続き

壱岐市内のコミュニティ・スクールの管理職（校長、教頭）の実相を検討するために、計 14 名（校長８名、教頭６名）に対するインタビュー調査を実施した。

調査実施日は 2019 年 8 月 22～29 日であり、対象者の職務時間の都合等を勘案し、管理職（校長、教頭）の同席や 1 対 1 によってインタビュー調査を行った。調査時間は、1 時間～1 時間半前後であり、半構造化形式で実施した。

(2)　考察の視点

管理職に対するインタビュー調査は、以下の視点から考察を行った。

①管理職と教職員とのつながりについて

②管理職と家庭とのつながりについて

③管理職と地域とのつながりについて

④地域人材の発掘について

⑤具体的な取組について

## 4　管理職の働きかけから見えてきたもの

インタビュー調査から得られた管理職としての思いや考えの一部を以下に示す。

(1)　管理職と教職員とのつながりについて

・先生方と目指すものを共有したい。
・置かれた状況をかみ砕いて、ある程度の指針を示す。
・職員室で子どもの話題になる。言える体制になれば、一人で抱え込まない。
・みんなで育てるという扉を開くのが校長の役割かなと思っている。
・会話をするために一人ひとりを見ておかないと会話さえできない。
・先生方や教頭先生を育てるという意識。
・寄り添っていかないといけない。
・先生方が動きやすいということが、子どもたちの教育に大きく反映する。

・学校運営にどう参画したという意識にどう気付かせるかが大事である。
・怒る状況になったときは、自分の指導のまずさだと思う。
・先生方のモチベーションをいかに上げられるかということを大事にしている。
・教頭先生や先生方が元気に笑顔で仕事をしてくれることが、校長としてのやりがいだと思う。
・本業に専念するために、できることがないか意見を求める。
・授業を見たら、必ず感想をフィードバックする。
・何があろうと労いの言葉をかける。
・今の学校で力を付けて、送り出すのが役目だと思う。

管理職は学校経営方針に込めた思いを共有することが第一歩であると考えている。その思いが浸透し、合意形成へと結び付くことで教育効果を生み出すと捉えていた。また、労いの言葉をかけることで信頼関係を築き、モチベーションを向上させる働きかけを意識していることが見えてきた。

(2)　管理職と家庭とのつながりについて

・保護者も、子どもも好きでその状況を背負っているわけではない。
・子どもに向かい合う時間や受け入れる時間が貧しくなっている。そこを踏まえた上で何を与えるのかを考え、行動していかないといけない。
・子どもの成長を通して、学校でしていることが伝わればいい。
・地域行事など、子どもが頑張っているところに顔を出す。保護者とのつながりの機会を自分からつくる。
・どれだけ保護者に響く言葉をかけられるか、どうやって保護者の心を掴むかが大事である。
・保護者は敵ではなくて、味方だと思っている。
・学校をよくするために力を貸してくださいというスタンス。その気持ちをあいさつにも込める。
・対応は、電話や連絡帳の活字ではなく、顔を見て話す。何かあったらすぐに面談をして対話する。
・保護者の意識改革、親育てをしないといけない。

管理職は学校外で活躍する子どもの姿を見て、保護者とつながる機会をつくっていた。保護者は敵ではなく、味方であると捉え、子どものために力を貸してほしいという思いを語ることを大事にしていた。保護者に対し、いかに心に届く言葉をかけられるのか、重要視していることが見えてきた。

(3)　管理職と地域とのつながりについて

・地域の人は客観的に見ているので、そこを変えるためには、学校を見える化しないといけない。
・地域と学校を結ぶ通信を発行する。
・学校を地域の人が集まってくる場所に位置付け、役割としたい。
・地域行事には顔を出すということを意識している。
・学校だよりは、地域の全家庭に配布している。
・行事の時の子どもの姿で語る。
・地域を知ることが、人を知ることだと思う。
・理念や、考え方、地域の協力のよさをいかに発信できるかが地域とのかかわりの大切なところ。
・自分自身が地域住民の一人として、地域に溶け込んでいく。
・地域の方に出会うには足で稼がないといけない。
・地域の方への手紙は、時間がかかっても持ち回り。郵送という手段は使わない。

地域は学校を客観的に捉えていることから、管理職は何かを変えるためには、学校を見える化することが大事であると考えている。その中で、学校と地域を結ぶ通信を発行したり、役員への手紙は直接渡したりと、つながるきっかけをつくっていた。また、学校が地域の人の集う場になるようにという考えをもっていることが見えてきた。

(4)　地域人材の発掘について

学校教育、家庭教育、社会教育がそれぞれに教育機能を充実させるためには、地域人材の発掘が必要不可欠であると考え、管理職としてどのようなことを大切にしているのか、次に示す。

・地域がずっと続くために、子どもたちがふるさとを大事にして、そういった子どもを育てようと語る。
・地域コーディネーターは、次の世代や人につなぐことができる人選をしないといけない。
・常にかかわりに入れ込んでいきながらつないでいく。
・学校の中だけにいたら見えないことも、足を運んで、出向いてみると人が見えてくる。
・学校運営協議会の役員の中に女性がいてくださることで、意見が広がり、まとまる。
・PTA 役員が、今度は地域コーディネーターに育っていく。
・子どもが幸せそうな姿を地域の人に出会わせたい。そういうことを演出する。それが地域住民のやりがいとなる。
・何を目標としていくか、お互いにいいと思うことを考える。

管理職は地域人材の人選が重要であると捉えている。役員は多様な考えをもった人が集ま

るようにし、PTA 役員は将来的に地域コーディネーターに育てていくことも視野に入れている。子どもの成長の姿を地域住民に出会わせる方法について考えていた。

(5)　具体的な取組について

インタビュー調査において、つながることで実現した具体的な取組について、次に示す。

- ある団体から他の団体の取組に対して、「収穫祭の在り方を地域に開いていこう。」といった前向きな意見がでるようになった。
- 朝の立哨に地域の方だけではなく、企業の方も参加されるようになった。
- 地域の合唱団を学校の発表会に招待して歌っていただき、子どもも、保護者も一緒に合唱することができた。
- 地域の方の声かけで、子どもだけのラジオ体操が、地域のラジオ体操になった。
- 夏休み作品展が、警察や幼稚園、図書ボランティア、保護者を巻き込んだ、地域も一緒になった作品展になった。

農作物の収穫祭を地域に開いていた。担任以外が、主体的に考えを提案する場面が出てきた。また、地域の合唱団を学校の発表会に招待し、子どもも、保護者も一緒に合唱する取組もあった。さらに、地域からの声でラジオ体操をしたり、地域を巻き込んだ夏休み作品展を催したりと、人のつながるきっかけづくりが行われていた。

## 5　考察

コミュニティ・スクールの管理職へのインタビュー調査の結果を踏まえると以下のことがわかった。

まず、教職員とのつながりについて尋ねたところ以下のような回答があった。

- 管理職として指針を示す。先生、よく頑張っているよって。そこは、今度みんなで話して、一人で被るんじゃなくて。
- 担任は子どものことを一生懸命伝えなさいと。そして、必ず報告・連絡・相談してと。
- 自分で切り開いていく先生になってもらうためには、やっぱり今の学校でそういう力をつけていって、送り出すのが自分の役目かなと思って。

管理職は教職員とのつながりの中で、教職員を守る働きかけや個の力を見極め、将来を見据えて力を伸ばす働きかけに努めていた。そうすることが、教職員にとって働きやすい場をつくり出すことにつながると考えた。

また、家庭（保護者）とのつながりについて尋ねたところ以下のような回答があった。

- 保護者も、子どもも好きでそういうものを背負っているわけじゃない。
- 保護者の意識改革だね。親育てやね。

管理職は家庭（保護者）とのつながりの中で、家庭の置かれた背景や思いに寄り添いながら、保護者を育てる働きかけを大事にしていた。そうすることが、保護者にとって子育てし

やすい環境をつくり出すことにつながると考えた。

さらに、地域とのつながりについて尋ねたところ以下のような回答があった。

・地域を知るっていうのが、人を知ることかなと。

・何か地域で行事があれば顔を出す。そこは、大事にしないと。

管理職は地域とのつながりの中で、地域に出向き、人に出会うきっかけを大事にしていた。さらに、地域の力を学校教育に巻き込む働きかけを行い、地域住民が教育に参画し、協働する取組を仕組んでいた。

このような取組を仕組むためには、地域人材の発掘が必要である。その中において、地域住民にやりがいを感じさせ、地域で育つ子どもの育成に尽力するといった自覚を促す働きかけを管理職は大切に考えていた。また、管理職は人材を発掘することができる場に顔を出すことからはじめ、子どもの将来や地域の未来のことを考える人を育て、その思いをつないでいかなければならないことを重要視していた。

そのような関係を構築するための手法としてコミュニティ・スクールはあるが、そこには学校・家庭・地域が求めることを互いに語る場が必要であると理解した。また、実現可能で持続可能な取組に向けて、学校教育、家庭教育、社会教育が教育機能を発揮できるようにしなければならない。そうすることで、子どもの育ちを支える大人の関係が構築できると考えた。学校・家庭・地域にとって子どものために何ができるのかを考えるとともに、大人にとっての学びの場でなければならないと理解した。

## 6　管理職として大切にすべきこと

コミュニティ・スクールの管理職へのインタビュー調査を通して、得た情報をもとに、管理職が子どもにかかわる大人に対して、つながりの中でどのようなことを考え、どのようにかかわることが子どもの育ちのためになるのか、大切にすべきことを明確にするため、チェックシートを作成した。

現時点における管理職として大切にすべきことを見える化し、管理職としての自分を振り返る際の指標にしたいと考えた。

○教職員とのつながりで大切にすべきこと

| |
|---|
| □授業を見て、感想をフィードバックしているか。 |
| □教職員の指導の成果を子どもの成長の姿を通して語っているか。 |
| □教職員一人ひとりの背景を把握した対応をしているか。 |
| □教職員の体調管理に努めているか。 |
| □週案に個に応じた言葉を添えているか。 |
| □教職員からアイデアを募っているか。 |

| |
|---|
| □個を育てる意識をもってかかわっているか。 |
| □傾聴の姿勢を大切にしているか。 |
| □教職員との距離感を大事にしているか。 |
| □教職員一人ひとりのことを知ろうとしているか。 |
| □働きやすい職場づくりに努めているか。 |
| □教職員の心の安定のために寄り添っているか。 |
| □教職員が話しやすい雰囲気づくりに努めているか。 |
| □教職員の頑張りを情報発信しているか。 |
| □教職員の頑張りを承認し、価値付けているか。 |
| □教職員の個の力を見極めて、かかわっているか。 |
| □教職員へ個に応じて支援しているか。 |
| □学校経営方針等、管理職としての思いを語っているか。 |
| □教職員が一人で抱え込まないように声かけしているか。 |
| □自己目標管理シートと関連付けて、個にかかわっているか。 |
| □指導の様子を掴むために、校内巡視しているか。 |
| □思いを引き出し、学校運営に参画する意識を高めているか。 |
| □教職員のモチベーションを高めるかかわりをしているか。 |
| □教職員の今後を見据えたかかわりをしているか。 |
| □教職員から学ぼうとする姿勢をもっているか。 |

○家庭とのつながりで大切にすべきこと

| |
|---|
| □来校された保護者の方を玄関まで出迎えているか。 |
| □子どもが学校外で頑張っているところに顔を出しているか。 |
| □対応は、電話や活字ではなく、直接会って対話しているか。 |
| □保護者は味方であることを意識してかかわっているか。 |
| □子どもの成長に関する会話をしているか。 |
| □保護者が負担だけを感じるような取組を行っていないか。 |
| □保護者を育てる意識をもってかかわっているか。 |
| □保護者の心に届く言葉をかけているか。 |
| □保護者と地域をつなぐ橋渡しをしているか。 |
| □保護者の情報を迅速に掴んでいるか。 |
| □保護者を理解し、寄り添っているか。 |
| □保護者の願いに誠意をもって対応しているか。 |

○地域とのつながりで大切にすべきこと

| |
|---|
| □地域に出向いて、地域のことを知ろうとしているか。 |
| □学校だよりを地域の全家庭に配布しているか。 |
| □地域の方の活躍の場、集う場を学校につくっているか。 |
| □社会教育の重要性を理解し、人を知ろうとしているか。 |
| □地域住民から考えや思いを得て、学校教育に反映しようとしているか。 |
| □地域役員への手紙は、直接持っていっているか。 |
| □教職員の取組を見える化し、地域とつなごうとしているか。 |
| □課題を見える化し、地域を巻き込んで対策を立てているか。 |
| □地域に溶け込み、顔でつながろうとしているか。 |
| □地域の声を聴き、思いの具現化に努めているか。 |
| □地域の強みを知り、教育活動に生かしているか。 |
| □地域と学校が互酬性の関係を築いているか。 |
| □子どもの成長の場面に地域住民を出会わせているか。 |
| □学校の教育活動や子どもの動きが地域に見える化しているか。 |

## 7　研究のまとめ

### (1)　研究の成果と課題

コミュニティ・スクールの管理職に焦点を当て、インタビュー調査を行い、より一層子どもの育ちを支える大人のつながりが重要であることに気付いた。その中で、子どもの成長に対して学校・家庭・地域が学校教育・家庭教育・社会教育の役割を自覚することが大事であった。また、「寄ってたかって」子どもの成長を支える大人集団の関係の構築が必要であった。

大人がつながるためには、まず管理職として思いを語ることから始めなければならない。相手の思いを理解し、合意形成を図りながら、互酬性の関係を実現するような働きかけが必要であった。また、学校をコミュニティの核として、子どもや地域の将来を見つめ、地域総がかりで子どもにかかわる大人集団をつくらなければならない。その上で大切にすべき考えや具体的な方法について、出会えたことが本研究の成果であると言える。

しかし、多くの管理職へのインタビュー調査はできたが、管理職側からの考えに留まっており、保護者や地域住民の考えを知るといった双方への調査には至っていない。よって、管理職がつながるために働きかけたことに対し、家庭や地域はどのように受け止めているのかという結果が得られていないことが課題として挙げられる。この点は、今後の実践において検証を行い、さらに子どもの育ちを支える大人のつながりの構築について考えていく。

(2)　つながりをもつことの重要性

本研究を通して、つながりを求める管理職であるのか、つながりを意識しない管理職であるのかによって、子どもの育ちにおいて出会わせる大人が変わってくることを学んだ。子どもに関する多様化・複雑化する問題に対し、学校教育だけで解決することが難しいことを管理職がまず受け止めなければならない。そして、地域の子どもは地域で育てることを学校・家庭・地域の大人がつながりをもち、実現に向けて動くことが求められる。その中で、管理職は学校教育では何ができ、何ができないのかを見極めることが大事である。学校・家庭・地域の強みや弱みを互いが見つめ合うことで、学校教育、家庭教育、社会教育において、どのような役割を担うことができるのか考えることができる。それが、教職員、保護者、地域住民にとっての学びの場になると考える。

つながることができれば、学校教育目標の具現化に向けて、家庭や地域と協働し、実践できることになる。管理職は、働きかけによって将来社会に飛び立つ子どもたちに対し、身に付けさせる力が大きく変わることを自覚すべきであることを学んだ。

また、インタビュー調査を通して、管理職は今社会で何が起こっているのか、理解を深めなければならないことに気付いた。例えば、壱岐市ではSDGｓ未来都市計画やまちづくり協議会の動きが進んでおり、行政の動きを掴むことで人をつなぐきっかけになることを学んだ。よって、管理職は社会の動きに敏感になり、学校教育と結び付けることができないか、常に意識して動く、実行力が求められると考えた。

子どもの将来、地域の未来のことを考えて動き、子どもにとってつながりのある地域であれば、子どもの帰ってくる場所となり、その場所はふるさとになる。居場所づくりをつながりによってつくることも子どもの育ちを支える大人の役割であると捉えるとともに、改めてつながりをもつことがいかに重要であるのか、本研究を通して理解を深めることができた。

**引用・参考文献**

・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編』
・志水宏吉・若槻健（2017）『「つながり」を生かした学校づくり』東洋館出版社
・長崎県教育委員会（2019）「第三期長崎県教育振興基本計画 2019-2023年度」
・長崎県（2019）「豊かに育て　ながさきの子どもたち（長崎県教育大綱）」
・長崎県教育委員会（2019）「長崎県の教育（令和元年度）」